

現行所得税法ハ最近経済界ノ枢軸タル会社事業ノ堅実性ヲ妨ケ個人所得ニ
 対スル課税累進率高キニ失スル爲メ保全会社ノ濫設ヲ誘致シ國債ノ利
 子ヲ免除スル爲メ商工界ノ資本ヲ此方面ニ偏傾セシムルノ嫌アル等裁多ク欠
 点アルヲ以テ適當ノ改正ヲ加フルノ必要アルハ明ナリ
 盖シ現行所得税法ハ欧州大戦當時ニ於ケル戦時利得ニ対スル課税ヲ爲
 シ戦后ニ及ンテ之カ整理ニ着手セス從テ一般ノ負擔重キニ過キ或ハ企業ノ
 發展ヲ阻害シ或ハ物價金利ノ標準ニモ影響ヲ及ホスコト斷シトセス海外
 諸國ニ於ケル戦后税制整理ノ實際ニ鑑ミ今ニ於テ適當ノ改正ヲ施シ以テ
 負擔ヲ軽減シ又法人及個人各税種ノ間ニ於ケル負担ノ輕重ヲ考量シテ
 其ノ均衡ヲ得セシムヘシ若シ夫レ行政財政ノ整理ヲ断行シテ尚國家生存上
 必要ナル施設ノ財源トシテ現行法ニ基ク所得税收入額ノ限度ヲ動カス如キ
 軽減ヲ行ヒ難シトスルモ尙左ニ叙述スル如キ方法ニ依リ税法ノ改正ヲ爲シ以

所得税法改正ニ關スル意見 (日本經濟聯盟會)

テ前記ノ諸欠矣ヲ矯正セシコトヲ望ム

改正ノ一案トシテ株式所得ノ源泉課税ヲ主張スルモノアリ此種源泉課税ハ徵稅ヲ容易ナラシメ國庫ノ收入ヲ増加シ然モ事實ニ於テ殆ント株主ノ所得ニ影響セス加フルニ徵稅ノ爲メ金融界ヲ壓迫スルノ懸念ナキ等哉多ノ利矣アレトモ租稅ノ本質ト時代ノ趨勢ニ鑑ミ個人所得ノ課稅ハ現行ノ綜合制ヲ維持シ之ニ源泉稅ノ長所ヲ加味シ以テ法人ノ課稅ヲ裁分増加シ之ニ依リテ得タル財源ニ依リ個人免稅矣ノ引上及累進率ノ緩和ヲ計ルコトヲ最モ適當ナリト信ス

國債利子ノ免稅ハ政府ノ公債政策ヲ便ナラシムル外何等理論上ノ根據ナシ現在ノ如ク課稅ノ増進ニ趨勢ニ於テハ資金ハ漸次商工界ヲ去リ公債ニ傾ルルノ傾向ナキニ非ス此ノ如キハ經濟界ノ活動ヲ沈滞セシメ國家ノ進運ヲ阻止スル所以ニシテ吾人ノ斷シテ取ラサル所ナリ

個人所得ニ對スル累進率ヲ緩和スルトキハ現在ノ保全会社ハ大半其ノ設立ヲ必要トセサルニ至ル(シ然レトモ尚保全会社ニ據リテ課稅ノ減免ヲ企圖スルモノアラハ現行法規ノ適用ニ依リ嚴正ノ取締ヲ加フルノ必要アルハ言フ俟タス

本会ハ前述ノ旨意ニ基キ左記諸案ノ改正ヲ提案セントス

第一 第一種(法人)所得稅ノ改正

甲、留保所得稅及配當所得稅ノ二項目ヲ廢止シ之ニ代フルニ法人利益ニ對スル百分ノ七半ノ比例稅ヲ設クルコト

留保所得稅ハ元來保全会社ノ設立ヲ取締ルノ目的ニテ設ケラレタルモノナレトモ其ノ結果会社資産狀態ノ基礎ヲ薄弱ナラシムルヲ以テ本稅ハ配當所得稅ト共ニ廢止シニ稅ニ代フルニ前記ノ比例稅ヲ新設スルヲ適當ナリト認ム

之ク爲メ增收金千七百十萬圓(大正十一年度ノ実績ニ基キ計算ス)ヲ得ヘシ

乙、超過所得税ハ現行ノ俣存置スルコト

本税ハ其ノ存置ヲ否定スヘキモノニ非サルノミナラス差シ之ヲ廢止スルトキハ其ノ結果ニ千万円以上ノ歳入減ヲ生スルヲ以テナリ

丙、公債、社債、銀行預金、利子ハ既ニ第二種所得税ヲ課セラレル

モノナルヲ以テ法人ノ課税所得ヨリ除外スルコト

之カ爲メ多少ノ減收ヲ生スヘキモ其ノ額ハ蓋シ少額ニ過キサルヘシ

第二 第三種(個人)所得税率ノ変更

個人所得ノ免税莫ヲ千円トシ之ニ対シ千分ノ五ノ税率ヲ課ス

累進率ハ之ヲ緩和シテ百分ノ二十ニ止ムルモ尚且フ所得税額ニ減收ヲ来スコトナクシテ之ヲ逆行シ得ヘシト信ス然レトモ其ノ累進緩和ノ程度ハ技術的ノ按排ニ委セ茲ニハ只第一種及第二種所得税ノ増加ニヨリテ得タル所ヲ以テ免税莫ノ引上及累進率ノ緩和ニ因ル減收補填ノ財源ニ充

当センコトヲ希望ス

第三 国債利子ノ課税

国債ノ利子ニ対シ百分ノ四ノ税率ヲ課スルコト

之カ爲メ約五百十萬円ノ増收ヲ得ル見込アリ